毛利子全集

第四巻

吉田幸一編

近世文藝資料 12

古典文庫刊

昭和四十八年六月五日印刷発行　限定版

非売品

長嘯子全集第四巻

編者兼発行者　吉田幸一

印刷製本　帝都印刷製本株式会社

発行所　114 東京都北区西ケ原三ノ三四ノ一二　古典文庫

凡例

一、『長嘯子全集』全五冊の第四巻として、長嘯子関係の左記和歌資料四部を収めた。

①『難挙白集』〈慶安三年正月成・尋旧坊撰〉　三冊は、『挙白集』に対する難書である。『挙白集』の撰者たる公軌・景軌・春正らが、もと貞徳門であつたのが、中途で長嘯子の門に奔つたことに対する反感が、本書となつて表われたのである。したがつて、本書の撰者旧尋坊とは貞徳側の古い門弟の一人であろう。本書で俎上にあげた『挙白集』の歌は二三一首、和文は五篇である。また別本と称するものから『挙白集』の未載歌三四首をあげていることも注目に値する。

②『挙白心評』（難々挙白集）〈今古残葉集本〉　一冊は、撰者未詳。『挙白集』と難書との調停の役割を果しているが、『難挙白集』のみを論評したものではない。難者尋旧坊の行き過ぎを戒めると同時に、批難を受けた側の長嘯門の公軌や春正らが、貞徳に対して義理をわきまえぬ振舞があつたり、思いあがりがあつたことをもたしなめている。したがつて、本書の

撰者は、長嘯、貞徳いずれにも旧知の第三者の撰述であろう。

③『正木のかつら』〈書陵部蔵伊達本〉十二巻二冊。山本春正・清水宗川撰。水戸光圀の命により、両名が水戸家に来仕して一、二年後の寛文六年ごろから撰集を始め、八年を要し、延宝元年に完成。慶長末年からの地下や武家を中心にした近世和歌史上注目すべき撰集で、歌数一四二七首。作者は天哉（長嘯子）三六首、玄旨（幽斎）三〇首、貞徳二一首をはじめ、貞門、長嘯門および武人では光圀一五首以下、徳川御三家、政宗、忠興、八雲軒等、計四五二人を数える。

④『和歌視今集』〈内閣文庫本〉二十巻。豊臣秀三撰。正徳元年十月成。秀吉、家康、光圀以下公家の外、常縁・宗祇・肖柏・道堅・玄旨・長嘯子・貞徳・元政等その他近世前期の人人の歌を集め、『続古今集』の構成に倣い、部立を設けて二十巻とした。歌数一〇四九首。作者では元政五三首を最高に、長嘯子（勝俊）五一首、道堅四六首、玄旨四〇首の順である。長嘯の弟の秀秋三首、次弟利房二九首、勝俊女三首などの入集も注目されよう。

一、所収本の翻刻については、それぞれの例言に記した。

一、所収本の解説は、第五巻に収めた。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

一、終りに、翻刻出版を御許可下された宮内庁書陵部、内閣文庫、岩瀬文庫に対し、厚く御礼申上げる。

昭和四十七年四月吉日

吉田幸一

目次

凡例

一、『難挙白集』〈慶安三年板〉……一

二、『挙白心評』〈今古残葉集本〉……一〇三

三、『正木のかつら』〈宮内庁書陵部・伊達本〉……一一九

付、『正木葛作者考』〈宮内庁書陵部・伊達本〉……三六三

四、『和歌視今集』〈内閣文庫蔵・伴直方本〉……三八三

一、難挙白集

（挙白集不審）

例　言

一、『難挙白集』三冊は、奥に「慶安三年二月下旬　尋旧坊誌之」とある板本である。ここにそれを底本として翻刻するにあたり、次の方法をとつた。

㈠　本文は原文のままを志向し、漢字・仮名の別、仮名遣などはすべて底本の通りとしたが、字体は概ね現行活字体に従つた。

㈡　底本には清濁点が所々に施されており、句読点の別はほとんどないが、新たに濁点を加えず、句点も原文のままにした。但し、例外があれば、ママと傍記した。

㈢　『挙白集』〈慶安二年板〉から尋旧坊が抄出した歌・文には、その頭に排列順番号を洋数字で施し、また、検出対照の便を考えて、挙白集歌番号を歌の下（　）内に付けた。

但し、「別本にある歌」には、彰考館本『挙白集』の歌番号を〈　〉内に付けた。因みに、〈彰補〉は、彰考館本「挙白集補遺」の略号である。

㈣　文中の引用文、引用歌句などには、適宜に「　」を施した。但し、〈〉印は、原文にあるものである。

難挙白集上」（外題）

のとやかなる空の夕月。霞のひまさし出るけはいなれは。簾てづからかゝけて。日比ふりつるあまりのもりぬれたる。ひさしのはしつかたをしのごひ独なかめゐたるに。葎にまかせたる門に物のさはる音すめり。たそかれよといらへつゝ。つと入をみれは。例もとぶらふ人也けり。こちとまねきて。あばらなる板じきのすがごも。みふにしぞきて七ふゆづりつ。うちすき侍るに。梅かゝのざとかほれるむかしの事もなつかしくたちより給ふなとうちかたらひ。人めしてたづさへたるさうしよとて十巻ありつるを。これなん天哉翁の家の集なる。このほといたにえりとゝのへしをもとめてかへるに。先かたみにみんとあれは。かたはしによむ。けにおかしきふしにあはれくはゝり涙もさしぐむほと。月いりなん道たど〳〵しからぬまにとあ

はたゝしけれは。さすかにとめわつらひ。さらはこれ一帖のこし物したまへ　猶打かへしずじなんといへは。とゝめてかへりぬ。灯かゝげて又くりひろげみるに。いさゝか心ゆかぬ所〳〵あなるをまぬき。(ママ)たよりしてたつねまほしくかきつく。まだ難波津のはなちかきより。あさか山の影みるかたたつねて。ふるさとを出都の内外にさそらへしもはや二十とせあまりになりぬれと。しきしまの道には猶あしふみたつへきよすがもなし。しかはあれと心をたつねといへれは。ほねなきみゝずもちからなきかはづをかたらひ。すいたるくせのやまぬもにくしや。翁の御事は名をえし哥人にて。昨日の詠はけふあき人の市のちまたにずじ。けさの言葉は夕にしづのめも田声にうたふ。まして心しれる上つかたはさそやあらん。をのれ身いやしく心おろかにして。いぶかしきうたのしりへにことはをつけ侍るおほけなさは。神もうけす仏もつみしたまふめれと。ゆめ偏執の心はなし。たゝくらき心のやみをあかさんと。あそをたのめてうかゝひ物し侍り。かつ〳〵も亦あたりたる一ふしもあらは。世ゆすりてこの口まねしつる道の規のさはりをふせかんと。おもふ心のおこな

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

るにや。つゐであしからすは。おとゝの高覧にもたしたふびてんとあふくものならし

挙白集不審　春哥

（一）

1 霞たつあふ坂山のさねかつらまたくりかへし春はきにけり

此のうた尤優美にきこえ侍り。されとも巻頭に置るへき哥にはあらさるへし。代〻の勅撰は申に及はす。三十六人集より後〻の哥仙の家集をみるに。巻頭は理明かにして徳のそなはり。心正詞直に。しかも長高き哥を撰ひ残せり。但その品をとゝのへすして落草なとをつぎのへ。巻にもしとち置もあり。此老翁も世をすてめける隠士なればさもや侍らん。たゞ心のまゝにこのめる躰のうたをかき置給へるを。そのまゝうつしけるにや。題も哥も前後不続の集なり。しかれとも世の人の耳なれたる哥をけづり捨。又所〳〵のことばかきに。なにとし給ひかとし給ふなとあれは。翁の自記とはみえす。門人撰ひならへたる事あきらか也。さしも明哲にきこえし人の門弟の。此理はしれるかしらさるか。此哥あしきといふにはあらす。「霞たつ」といふよりうちくさり本哥の心詞もうか

ひておかし。さなから「人にしられて」といふ句もこもれり。また「かすみたつ」とあるは。かの本哥の「人にしられて」といふ。て文字清たる儀によれる歟。当流の御説にはてもし濁る儀よしとこそきけ。これさねかつらのたよりもふかしいかゝ。これらまてはわきまへかたかるへけれは。いかに巻をくりかへしてかつらにかけたる頭そや不審

2 くる春は年のうちとの神代よりいかにさためて先かすむらん　（三）

「春たつこゝろを」といふ哥二首ありて。次に「年内立春」とならへたり。此哥巻頭の躰あらた也。うちと内外にそあらん。外の字いかゝ

3 年のをゝこそとことしによりかけて一すちならぬ春はきにけり　（四）

題「年内立春」とあり。こそを今日たつ春にして。ことしを明ぬへき春と心うへき歟。現に立つ春をこそとはいひかたし。又過つる春立春ありし年にてそれをこそとさしたるか。ことしは只今の春にてさも有へし。しからは題に詞をくはふへき事也。こそどいふもことしといふも。うちまかせて春の季はかりには

有かたし不審

4 百夜ともしちのはしかきかきつめぬ冬の日数に春はきにけり　（六）

同しく「年内の立春」の題也。寛永十一年にも冬の日数はたらすはあらす。冬節の内に春たつと思はれけるにやおろか也

5 雪の内にをしても春のたつか弓紀の関守やけふをしるらん　（八）

題に「寛永十九年をしほ山にて」とあり。たつか弓紀の関守。小塩山にたよりある事にて題にことはりたる歟。此哥年内の立春のならひに入たり。年内の心おほつかなし。雪の内とは春も云へし

6 青羽山春たつけふのうすかすみ日をへは八重の九重のそら　（一〇）

題に「む月なかは立春ありけるとしの元日」とあり。此詞書いかなる事ともきゝえす。寛永二十年の元日に小塩山にての景を詠し給ふ秀逸とて世にあはれかりしに。此詞書にていさゝかなに心そやと思はれ侍り。又いつそのとしにや。烏丸殿資慶卿またわかうおはして。「一重も八重にちる桜哉」と詠しおはせし

をその比もてはやしける。此翁も殊にあはれふかしなとたひ〳〵に及へり。しかるを此詞同しさまなる老耄のゆへか。又各別の事にや不審

7 花ならてまたぬことしのはつ夢にいれるはそれかよはのたをやめ　（二四）

「春のはしめのうた」とあり。ことしのはつ夢とふるくいひ習はせる歟

8 さほ姫のかたなもふれすけさは先かすみの衣いかて立らん　（二九）

さほひめの刀とは故ある事にや不審。案するに。拾遺集に〝から衣われはかたなのふれなくに先たつ物はなき名なりけり。〟是を本哥にとり給ふにや。「さほ姫の刀」とうちまかせてはいひかたし。哥さまもゆうならす

9 うちきらし霞も雪のした衣春にかさねて冬やきぬらん　（四六）

題「早春霞」也。それともきこえす。たゝ余寒の哥なるへしいかゝ。此詞書に「公軌にて月次の会はしめに」とあり。此集に始て人の名をかき出せるに公軌とはかりあれは。やんことなき人にやあらんと猶奥をみるに。春の部に此名十三所にありて。別人の名十三人みえたり。皆一所二所三所には過す。尤愛弟と

をしはかりて人にたつね侍しに。父は越前敦賀住人彦二郎といひて。いやしき民の幸ありて。とみさかへ商人となりしよねやか子の。京に住るいとやの十右衛門とて財宝にあきみちたる人の。此道にすきて。下京に貞徳といふ老法師をたのみ翁へまみえ。随分に奉公してならひなき門弟なりといふ。けにさもきゝ及し。されとかうやうの凡民を家名官途をもかゝすして、さすか前代は羽林たりし人の家の集に。うちつけに公軌とかく事撰者筆者のつみのかるゝ所あらし。翁は八十有余の老人也。知己朋友の尊貴あまたあるへきに。先にあまたの題にのせすして。つたなき事いふにたらす。かつ又師もめいぼくあらぬ事とも也。無心といひ放埒といひかなしふへし〳〵

10

けふは先里のあけまきしるへしてわかなつませよのかひかてらに　（五四）

正保二年の春若菜の哥也。珍しとて都人のもてはやすさもと覚てあはれなるふしなり。寛永二十年三月三日にある人のうた〝あけまきも牛ひき出て春の野の花見かてらにけふやくらしつ。〟これを又のとし家の女房のつてしてみせけれ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.